右腋窩に発生した脂腺癌の 1 例

愛媛労災病院外科

内 藤 宗 紀 田 中 忠 良 宮 原 義 門

森 重 一 郎

山口大学医学部第 1 病理

中 村 英 典

A CASE OF SEBACEOUS GLAND CALCINOMA IN THE RIGHT AXILARY REGION

Muneki NAITOH, Tadayoshi TANAKA, Yoshikado MIYAHARA and Ichiro MORISHIGE

Department of Surgery, Ehime Rosai Hospital

Hiddenori NAKAMURA

The First Department of Pathology, Yamaguchi University School of Medicine

脂腺癌のほとんどのものは、マイボーム腺由来であり、眼瞼以外の本邦報告例はわずか 25 例で、ほとんどが顔面および頭部である。最近われわれは、右腋窩に発生した脂腺癌のきわめて稀な症例を経験したので報告する。

症例は、58 歳、女性で昭和 53 年 1 月頃、右腋窩の腫瘤に気づき、3 カ月後に外来受診、生検の後、手術が施行された。

腫瘍は直径 5cm の半球状、弾性硬、境界鮮明、表面凹凸不整、易出血性、中心部に 3cm の潰瘍形成を認め、辺縁隆起、腫瘍底に黄白色・褐色の膿苔が付着し、腫瘍全体に黒褐色の色素沈着を認めた。

病理組織学的には、真皮上層から皮下組織にかけて大小の胞巣を形成して浸潤性に増生する腫瘍組織がみられ、ほとんどが大型の泡沫状あるいは空胞状の胞体をもっていたが、基底細胞様の腫瘍細胞はみられなかった。腫瘍細胞の胞体内には、Sudan III 染色で陽性の脂肪滴がみられた。

はじめに

Sabaceous gland calcinoma は Malherbe & Robin¹⁾により脂腺由来の癌腫であるとされ、すでに 1891 年に Allaire²⁾により第 1 例の報告がなされている。その後、多くの報告がみられるが、脂腺癌のほとんどのものは、マイボーム腺由来の癌腫であり、本邦においては 1919 年河本³⁾の眼瞼の癌腫の報告が最初である。1980 年までの眼瞼以外の脂腺癌の本邦報告例はわずかに 25 例で、その発生部位はほとんどが顔面および頭部である。最近われわれは、右腋窩に発生した脂腺癌のきわめてまれな症例を経験したので、文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者：58 歳、女性

既往歴：特記すべきことなし

家族歴：特記すべきことなし

現病歴：昭和 53 年 3 月 13 日初診であるが、約 3 カ月前に右腋窩の豌豆大の表面平滑な無痛性腫瘤に気づいた。その後、腫瘤は次第に増大し、約 1 カ月後には表面凹凸不整となり、自潰し、出血をきたすようになり、自発痛・圧痛を伴うようになった。

初診時所見：腫瘍は直径 5cm の半球状で、弾性硬、境界鮮明で、表面は凹凸不整、易出血性であり、中心部に径約 3cm の潰瘍を形成し、辺縁は隆起していた。腫瘍底には黄白色、褐色の膿苔が付着しており、腫瘍全体に黒褐色の色素沈着を認めた（図 1）。また、右腋窩リンパ節の豌豆大の腫脹を 2 個触れた。

図 1 初診時の局所所見

図 3 H-E 染色, ×100

図 2 摘出標本 (断面)

図 4 Sudan III 染色, ×400

入院時検査成績：赤血球 400×10^4 、血色素12.6g/dl、白血球7,600、血小板 15.3×10^4 、総蛋白6.1g/dl、総コレステロール238mg/dl、コリンエステラーゼ6.3u、LDH 272 u、GOT 7u、GPT 14u、Na 142mEq/l、K 3.8mEq/l、Cl 107mEq/l で、特に異常はみられなかった。梅毒血清反応陰性で、胸部X線写真でも異常を認めなかった。

手術所見：生検を行った結果、多染色性で大小不同のある核をもつ腫瘍細胞が真皮に巣を形成して増生し、その多くが中心部に壊死を認め、転移病巣である可能性も考え、原発巣の検討を行ったが発見できなかった。結局、皮膚付属器もしくは副乳腺原発の腫瘍と考え、3月24日、大胸筋外側半切除および腋窩リンパ節廓清を伴う腫瘍摘出術を行った。

摘出標本：腫瘍は5×5cm大、断面では灰白色調の腫瘍で、表面凹凸不整で辺縁は隆起していた(図2)。

病理組織学的所見：真皮上層から皮下組織にかけて大小の胞巣を形成して浸潤性に増生する腫瘍組織がみら

れ、一部では表皮との連続性がみられた。腫瘍はほとんどが大型の泡沫状あるいは空胞状の胞体をもち、核小体明瞭な異型性の強い核をもつ腫瘍細胞からなっていたが、弱好酸性の胞体をもつ腫瘍細胞もみられ、これらの細胞が充実性に増生していた(図3)。しかし、基底細胞様の腫瘍細胞は認められなかった。胞巣の中心部が壊死に陥り、面皰様になっている部も多くみられた。腫瘍は皮下脂肪織へ連続性に浸潤し、一部には脈管内に腫瘍細胞が認められ、遠隔転移の可能性が示唆された。また、腋窩リンパ節に転移がみられた。腫瘍細胞の胞体内には Sudan III 染色で陽性の脂肪滴がみられた(図4)。

以上の組織学的所見により、脂腺癌と診断された。

術後経過：術後 MMC, FT 207 投与、 ^{60}Co 照射を行って現在経過観察中であり、2年を経過したが、再発や遠隔転移はみられない。

考 察

脂腺癌の臨床的特徴は、Rook³⁾によると、顔面およ

表 1 本邦脂腺癌報告集計

No.	報告者	年齢	性	発病	部位	形状	大きさ (cm)	色調	硬度	転移	備考
1	山口 ⁴⁾	35	♂	4年	左耳介～左顔面	疣状、瘤状、潰瘍化		黄灰白色		(+)	遠隔転移
2	分目 ⁵⁾	76	♂	14年	鼻翼部	潰瘍状		淡黄赤色			
3	野村 ⁶⁾	72	♂	1.5年	左頸部～前胸部	丘疹、結節(板状硬化内)		鮮紅色～暗赤色	硬	(+)	化膿部切開底初発腫瘍
4	木村 ⁷⁾	59	♂	2年	右鼻翼	結節状	3×2.5×1.1	帯赤色	韌	(+)	いぼぬき軟膏
5	鈴木 ⁸⁾	58	♂	2年	左鼻翼		3.5×1.8				
6	荒川 ⁹⁾	65	♂	生来	左眼窩下部	堤状、潰瘍状	4楕円形		辺縁硬		免疫療法による刺激
7	加藤 ¹⁰⁾	63	♂	7年	陰茎～陰のう	潰瘍状		赤紫色		(+)	
8	川岸 ¹¹⁾	60	♀	45年	頭頂部	隆起、潰瘍状	7×9.5	橙赤色	辺縁硬	(+)	褥による外傷、肝・骨転移
9	川村 ¹²⁾	58	♀	15年	後頭部	茸状、潰瘍状	7×7.5×4		硬		
10	田代 ¹³⁾	52	♀	9ヵ月	前頭部	潰瘍状、硬結	鳩卵大	暗赤色	辺縁硬		
11	藤田 ¹⁴⁾	59	♀	8年	頭頂部	結節状	4.2×3.4×1.8				両発?
12	長島 ¹⁵⁾	78	♂	5年	右肘部	有茎状	1.7×2.2				
13	五十嵐 ¹⁶⁾	61	♂	2ヵ月	左上口唇	噴火口状	豌豆大	黄色	硬		
14	鷲尾 ¹⁷⁾	83	♂	7ヵ月	左鼻翼	丘疹、潰瘍、辺縁隆起	0.8×0.5				
15	小坂 ¹⁸⁾	75	♀	7年	後頭部	有茎性	11×6×7				
16	清水 ¹⁹⁾	83	♀	6～7年	左頬部	楕円形、凹凸不整、びらん	示指頭大	黒褐色～黄褐色			瘡痕上
17	上杉 ^{20) 21)}	93	♀	2年	鼻根中央	盒状、凹凸不整、潰瘍	4.5×4.5		弾性硬		
18	奥 ²²⁾	75	♂		背部	小結節	小指頭大	淡灰白色	弾性硬		
19	桑原 ^{23) 24)}	47	♂	6年	左腋窩	結節	小指頭大		硬	(+)	腫瘍
20	幾瀬 ²⁵⁾	75	♀	2年	外陰部	結節、潰瘍	4	赤色			
21	水野 ²⁶⁾	63	♀	6ヵ月	鼻尖部	半球状、びらん	0.8		弾性硬		
22	瀬戸山 ²⁷⁾	53	♂	1年	頭頂部	半球状、びらん	3×2.5×1	紅桃色			脂腺母斑上?
23	瀬戸山 ²⁷⁾	69	♀	7年	鼻背部	びらん	1×0.6×0.3		弾性硬		
24	麻生 ²⁸⁾	77	♀		左頬部	隆起	2×2	淡赤色			
25	自験例	58	♀	3ヵ月	右腋窩	結節、盒状潰瘍	5×5×5	黒褐色～暗赤色	弾性硬		リンパ節転移

び頭部に好発し、孤立性の固い多少隆起した半透明の腫瘍で、表面は健常ないし疣贅状で、色調は黄色ないし橙色、発育は緩徐で、転移はまれであるとしている。

Urban & Winkelmann⁴⁾によると、顔面または頭部にある発育緩徐な固い黄色調の結節であるとしている。臨床的に鑑別を要するものは、有棘細胞癌および基底細胞癌であり、眼瞼部に生じたものはさらに霞粒腫、粉瘤などである。

皮膚癌における脂腺癌の比率を Warren & Warri⁵⁾ は 4,000 例中 29 例、Stout⁶⁾ は 1,224 例中 2 例と報告しているように、脂腺癌の発生頻度はきわめて少なく、しかもそのほとんどがマイボーム腺由来のもので、これを除けば著者らが収集した限りでは本邦報告例は 25 例である(表 1)。

発生年齢は平均 65.9 歳。山口⁸⁾ の 35 歳から上杉^{24) 5)} の 93 歳まで広い分布をみる。性別では、男性 12 例、女性 13

例と性差はみられない。好発部位は加藤¹⁴⁾、幾瀬²⁹⁾ の外陰部、奥²⁶⁾ の背部、長島¹⁰⁾ の肘部、桑原^{7) 27) 28)} および自験例の腋窩を除いてほとんどが顔面、頭部である。大きさは鷲尾²¹⁾ の 0.8×0.5cm から川岸¹¹⁾ の 7×7.5×4cm まで病期期間によりまちまちであるが、3cm 径以上になって受診する場合が多いようである。色調は淡黄色、黄色、赤色、赤紫色がほとんどである。腫瘍に気づいてから受診までの経過は五十嵐²⁰⁾ の 2 ヶ月から荒川¹³⁾ の 65 年であり、平均 8.8 年と一般に長いようであるが、本症例では比較的急速に増大しているのが特徴的である。

予後は、一般に皮膚癌は早期に発見されやすいためか他臓器癌より良好であるとされており、Lever³⁰⁾ は脂腺癌はしばしば転移すると述べ、Rook³¹⁾ はあまり転移しないと。本邦報告例 25 例中転移をみとめたものは、遠隔転移 3 例、鎖状癌 2 例、リンパ節転移 7 例で、再発死亡例は 5 例 (20%) と、予後は他の皮膚癌と比較して

まだ不良であるといえる。それは、腫瘍に気づいてから受診まで放置している期間が長く、また良性腫瘍が前駆し、それが悪性化しても長期間放置されているためであろう。

病理組織学的特徴は、Urban & Winkelmann²⁾によると表皮と連続性がなく、真皮内に最も異型性の強い腫瘍細胞からなる小葉構造があり、胞体を有し、脂肪染色で脂肪滴が証明されるとしている。われわれの症例では、一部では表皮との連続性がみられたが、これは腫瘍の増殖によるものと思われる。

おわりに

以上、右腋窩に発生したきわめて稀な脂腺癌の 1 例を経験したので報告した。

撰筆にあたり山口大学医学部第 2 外科石上浩一教授の御校閲に深謝致します。

文 献

- 1) Demis, D.J.: Clinical Dermatology, Harper and Row, Publishers, Inc., Hagerstown, Maryland, 1972.
- 2) 河本：23) より引用.
- 3) Rook, A.: Textbook of Dermatology, p. 1938, Blackwell Scientific Publ., Oxford, 1972.
- 4) Urban, F.H. and Winkelmann, P.K.: Sebaceous malignancy. Arch. Derm, 84: 113, 1961.
- 5) Warren & Warri: 27) より引用,
- 6) Stout: 27) より引用.
- 7) 桑原宏始：脂腺腺腫, 皮膚臨床, 17: 393—398, 1975.
- 8) 山口：7) より引用.
- 9) 分目：7) より引用.
- 10) 野村 一：鑑状癌の形態を示せる脂腺癌について, 皮と泌, 6: 380, 1938.
- 11) 木村：7) より引用.
- 12) 鈴木：脂腺癌と汗腺癌の追加, 皮性誌, 47: 426, 1946.
- 13) 荒川忠良：脂腺癌, 皮と泌, 11: 33—35, 1943.
- 14) 加藤 正：皮脂腺癌の剖検例, 皮性誌, 65: 321, 1955.
- 15) 川岸：7) より引用.
- 16) 川村：脂腺癌について, 皮性誌, 63: 467, 1953.
- 17) 田代：7) より引用.
- 18) 藤田：7) より引用.
- 19) 長島正治：脂腺癌, 皮膚, 10: 520—521, 1968.
- 20) 五十嵐稔：Sebaceous Carcinoma, 日皮会誌, 83: 277, 1973.
- 21) 鷺尾 勝：脂腺癌, 皮膚臨床, 15: 160—161, 1973.
- 22) 小坂：7) より引用.
- 23) 清水康之：脂腺癌の 1 例, 西日皮膚, 36: 349—352, 1974.
- 24) 上杉 孝：脂腺癌の 1 例, 皮膚臨床, 17: 1029, 1034, 1975.
- 25) 上杉 孝：脂腺癌の 1 例, 日皮会誌, 86: 839—840, 1976.
- 26) 奥：7) より引用.
- 27) 桑原宏始：特異な経過と興味ある合併症を伴った脂腺癌 (第 1 報), 皮膚臨床, 18: 335—343, 1976.
- 28) 桑原宏始：特異な経過と興味ある合併症を伴った脂腺癌 (第 2 報), 皮膚臨床, 18: 710—717, 1976.
- 29) 幾瀬伸一：脂腺癌の 1 例, 日皮会誌, 86: 783, 1976.
- 30) 水野哲郎：脂腺癌の 1 例, 日皮欧誌, 86: 558, 1976.
- 31) 瀬戸山充：皮膚悪性脂腺腫瘍 4 例の臨床的病理組織学的検討, 西日皮膚, 39: 868—879, 1977.
- 32) 麻生和雄：脂腺癌の 1 例, 日皮会誌, 88: 113, 1978.
- 33) Lever, W.F.: Histopathology of the Skin, J.B. Lippincot Co., Philadelphia, 4th ed., 1967.